

氏 名 : 扇 野 綾 子
学 位 の 種 類 : 博士 (健康科学)
学 位 記 番 号 : 研博第 24 号
学位記授与年月日 : 平成 26 年 3 月 19 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条 1 号該当
論 文 題 目 : A 県における慢性疾患患児を育てる母親のストレス適応に関する研究
論文審査委員 : 主査 中 村 由美子
副査 大 井 けい子
副査 織 井 優貴子

論 文 内 容 の 要 旨

I はじめに

医療の進歩により従来難治性とされてきた小児領域の疾患の治癒率は向上し、多くの子どもたちが疾患を管理しながら生活を送ることが可能になったが、先行研究によると疾患のある子どもの母親は健康児の母親と比べてストレスが高い (丸他、1997) ことなどが明らかになっている。本研究では母親の心理的な強みに焦点を当てたレジリエンスの概念とストレスコーピングとの構造的関連を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法と対象

研究デザインは仮説検証型研究で、自記式質問紙を用いた量的研究である。ラザルスのストレスコーピング理論を参考に概念枠組みを作成し、それに基づき調査票を作成した。対象は小児科外来に継続的に通院している子どもの母親 168 名と、対照群として同地域の保育所または小中学校に通う子どもの母親 401 名である。倫理的配慮として調査票は無記名とし、回答は任意である旨を文書及び口頭で説明した。データ収集期間は 2013 年 5 月～9 月であった。調査内容は①基本属性、②精神的健康度 (GHQ28 日本語版)、③コーピング (TAC-24;神村,1995)、④レジリエンス (森,2002) とした。分析は記述統計の他、群

間比較のためパラメトリック検定を行った ($p<0.05$)。その後共分散構造分析により母親の心理的ストレス適応モデルを作成し、多母集団で検定を行った。

III 結果

対象者全体の平均年齢は 39.0 ± 6.8 歳であり、子どもの平均年齢は 8.8 ± 4.9 歳であった。「病児の母親群」247名と「健康児の母親群」332名に分けて比較したところ、病児の母親群では GHQ28 の下位尺度「身体的症状」「不安と不眠」「うつ傾向」が高く、さらにレジリエンスの「I AM」「I WILL/DO」因子が低く、「肯定的解釈」コーピングが有意に低かった。共分散構造モデルではストレス適応の構成因子は両集団ともに「自信」の影響が強く、特に病児の母親群では「柔軟な力」を構成する「楽観視」と「こころのゆとり」のパス係数が高かった。

IV 考察

病児の母親群は精神的健康状態が悪く、「自信」や「楽観視」「こころのゆとり」が低い状態であると同時に、それらは心理的適応において重要であるといえた。子どもの慢性疾患は努力だけでは解決できがたい問題であり、心理的適応には認知の変容が必要である。

論文審査結果の要旨

医療の進歩により小児領域の疾患の治癒率は向上し、子どもたちの多くが疾患を管理しながら生活を送ることが可能になってきた。本論文では、病気の子どもの母親の心理的な強みに焦点をあてたレジリエンスの概念とストレスコーピングとの関連を明らかにすることを目的に、母親の心理的ストレスモデルを構築している。レジリエンスという新しい概念を整理するとともに、心理的ストレス過程は複数の要因が相互に関連している複雑なプロセスである (Lazarus, 1999) ことから、仮設モデルの検証に適したとされる構造方程式モデリング手法を用いている。病児の母親の精神的健康は、健康児の母親と比べて低く、家族以外のサポートは得られていないことや構造方程式モデルから「楽観視」や「こころ

のゆとり」が適応には重要であることが明らかになっている。一部分析に不十分な点は認められるも、以上の知見は、先行研究の結果を支持し、さらに子育て中の母親の心理構造を説明しており、その新規性は高いものと評価され、博士（健康科学）の学位授与に値するものと認める。